

MANSORY SPECIAL

マンソリーの全世界

今、もっとも勢いに乗るチューナーブランドは？
そう聞かれまず名前が挙がるのがマンソリーだろう。
ベントレーカスタムで一躍世界のトップブランドに
名乗りを上げたマンソリーではあるが、
今ではその活躍の場を破竹の勢いで拡大している。
ボルシェ、フェラーリ、メルセデス、ブガッティなど、
その充実のラインアップは挙げれば切りがないほどだ。
また、欧州のみならず日本でもマンソリー熱は沸騰中で
2010年の新作であったパナメーラ用プログラムが
バックオーダーを抱えるほどユーザーに指名されるなど、
その人気はまさに世界規模と断言してもいい。
メーカーが生み出す市販車が既に十分な性能を持つ今、
チューニングシーンは大きな転換期を迎えている。
そんな激動の時代において、マンソリーは
カスタムの新たな方向性を誰よりも先に見出したのだ。
ドイツ生まれの孤高のプロフェッショナル集団が
切り拓くチューニングシーンの新時代。
その全貌をここで紐解いていきたい。



日本上陸。

マンソリーが生み出したスーパーモデル、サイラス。フルカーボンボディという最終兵器を手にした。アストンマーティンDB9ベースの超絶コンプリートだ。その世界限定15台中の1台が、極秘の内に日本上陸。最高峰のマンソリーと国内で対峙しその主権を握る。



MANSORY CYRUS

紀元前600年頃、中東を中心に栄えた古代国家、ペルシア帝国。現在でいうイランを中心に、エジプト、カスピ海沿岸、インドス河流域、そして中央アジアにいたるまでを圧倒的な軍力とともに支配下に治め、約200年もの間にわたって永き栄華を極めた。

その初代皇帝の名を、サイラス、という（キュロスとも発音される）。彼は軍事指導者として独特なる能力を発揮し、強大な帝国国家を築き上げたのである。

そんな偉大な名を現代に受け継ぐクルマがある。その名を歴史に刻む一人の皇帝と、一台の自動車を重ね合わせるなど、あまりにストーリーが飛躍しているかと思われるかもしれない。しかし、初めてその車名を耳にしたとき、まさに相応しいネーミングだと個人的には感じた。

マンソリー・サイラス。フルカーボンボディを採用する異例のコンプリートマシン。世界限定15台、その内の1台が日本上陸を果たしたのである。

◆ 雨が降りしきるその日、オーナーに納車される直前の段階でクルマと対峙する機会を得た。今回、車両の輸入を手がけた「オートプロジェクトD」のショールームに置かれたサイラス。海外のショー会場で何度か目にした経験こそあれど、やはり国内の見慣れた光景の中にこのクルマが佇む絵というのはいままでと異なるところがある。その姿を目にしたならば、まず誰しもがカーボンボディの美しさに言葉を失うはずだ。文字通り一糸乱れぬカーボン繊維の編み目が、車体の中心線を描いてV字を描くようにしてボディ全面を駆け抜けていく。あまりの「真実」ぶりに、それはクルマというよりかはむしろ芸術作品に近いのではないが、そんな



EQUIPMENTS

--- POWERTRAIN

MANSORY スポーツエンジン(2000cc)

MANSORY エアアウトレット(2000cc)

MANSORY パワーステアリング

--- FOOTWORK

MANSORY フルフラット(2000cc)

MANSORY フルフラット(2000cc)

--- EXTERIOR

MANSORY カーボンボディ

--- INTERIOR

MANSORY エクストラコンフォートシート

一片の説明も理由も必要ない、
対峙すれば超絶の全てが伝わる。

印象さえ受けさせてしまおう。
ベースとなったのはアストンマーティンDB9 (DBSでの製作も可能)。エクステリアパネルのほぼ全てのパーツが、マンソリーの「伝家の宝刀」ともいえるベキドライカーボン製パネルに換装されているのが最大の特徴だ。大型化されたフロントグリルや、ボディサイドに配された巨大なエアアウトレット形状などの特徴的フィニッシュは本来アストンがもたないリリスを開始する限定モデル「ONE77」からインスピレーションを得たものには間違いない。しかし、大きく盛り上がりつつ、サメス、風エアアウトレットを付けてボンネットや、ワイドな前後フェ

ンダー、さらにはレーシングカーさながらに後方に突き出たディフューザーなどのディテールには、明らかにマンソリーらしい気まじりが宿っている。アストンの佇まいと、マンソリーの排他的な見事に具現化した造形といえるだろう。
しかも、今回日本に上陸した個体は、ボディ表面が艶のないマットクリアで仕上げられている。実はドイツ本国のファクトリーで仕上げられたときは、通常のクリアコートでペイントされていたそうだが、さらなる個性を追求した日本のオーナーが再塗装をオーダー。結果として、艶消しのカーボンボディ、という独自のアビランスを獲得するに至っている。

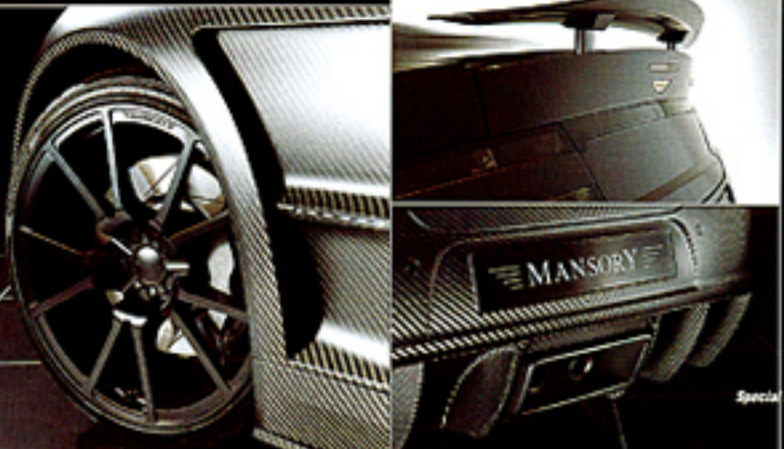
どうしても外装ばかりに目が行き届いてしまいが、意外にもこのクルマのハイライトはインテリアにある。過去のマンソリー流ド派手内装メイクの数々を目にしていると、このサイラスのインテリアは真正ブラスタイル程度の極めてコンサブな仕上げに仕上がっている。しかし、特筆すべきはそのクオリティだ。カーボンパネルは言うに及ばず、目にするだけで伝わるレザーの質感、一切の歪みなく車内を巡るスチッチなど、言葉にするには難いほど精緻ではあるが、とてつもなくクオリティが高いのだ。

**MANSORY
CYRUS
MANSORY SPECIAL**

どこに融れる機会も多いが、大きすぎてなくそれらと同様、もしかするとそれ以上の仕上げが求められる。確かに改めて考えてみると、マンソリーの強みは実はこの部分にこそあるのではないかと感じる。派手にクルマを飾ることは誰にでもできる。しかし、マンソリーの過激なモディファイは実はとても緻密に実行されている。同時に確かな品質が備わっている。世界一流セブから確固たる支持を得た理由が、その通り込み表れているかのようだ。
ドライカーボン製のボンネットを開けると、これが恐ろしく軽く開く。さらにはアストン製のV12エンジンが鎮座している。実はマンソ



顧客のいかなるオーダーにも応える「エクスクルーシブ・インディビジュアル・プログラム」によって仕上げられた高級の内装空間。配色こそシックだが、各所に配られたカーボンパーツ、ダイヤモンドステッチトリム、オリジナルデザインのスポーツステアリングなどのディテールが洗練された世界観を構築している。また、リヤセクションには連動に合わせて自動的に立ち上がる可動式トランスボイラーを搭載。車内のスイッチの操作も可能。スポーツエキゾーストには可変バルブシステムを採用しリモコン操作で音量を制御可能など、充実した装備にも注目したい。ホイールはフルフォージドモデルで、フロントに20インチ、リヤに21インチを装備。



リーはDB9からモアパワーを引き出すためのエンジンチューニングプログラムを設定していない。装着するのは吸排気システムののみ。では、サイラスはただのドレスアップ車なのだろうか？ 否、違う。ボディ全面をドライカーボンパネルで置き換えた時点で、圧倒的な軽量化を実現しているからだ。ストックにしてすでに十二分なパワーを有するエンジンは敷いてそのままに、カーボン素材の軽量化を活かしたパフォーマンスアップを図る。なんともマンソリーらしい合理的なチューニングアプローチではないか。
聞けば、オーナー氏はガレージのオブジェとしてではなく、普通に乗るためにこのサイラスを購入したのだという。値段にしてSLRマクラーレンやカレラGTをも超越する最高峰のコンプリートカーが日本に存在するという衝撃の事実。マンソリーというブランドの勢いを感じずにはいられない。
いつの日かストリートでこのクルマに遭遇する時がくることだろう。フルカーボンの箱に身を包み、街を駆けるマンソリー・サイラス。そのとき人は驚き歓声をあげ、前を行く者は奇跡なく進路を譲ることだろう。まさに現代に蘇った皇帝。ストリートの覇者である。



MANSORY Switzerland RANGE ROVER

マンソリーの手にかければレンジローバーもこの通り、今秋に登場したこの作品は、お馴染みのカーボンによるワイドボディと23インチホイール、最も厚くしたインテリアメイク、さらにおよそ300kgと4.1kgのエクストラパワーを持たせた超絶走るECUチューニングが施されたもの。これはレンジローバーの誕生40周年を記念して造られたという意味合いがあり、英国車を受けてはならないコウロッシュ・マンソリーの思い入れが詰まったプログラムだ。



MANSORY Switzerland X6M

マンソリー・スイスの最新作がこのX6Mだ。自コウロッシュというブランドで独自の印象をまき散らすボディメイクは、得意のカーボン成形技術で成し得たもの。搭載されるパワーユニットは最高出力610ps、最大トルク88.8kgmと驚異の数値。ノーマルに比べ約110ps、27.8kgmの上げ幅で、エキマニからすべてオリジナルの排気系とECUチューニングなどにより達成した。この巨体を100km/hまでわずか4.2秒で到達させ、最高速は309km/hに及ぶ。



百花繚乱のマシン、続々と登場！ 帝国の“攻勢図”。

独特のセンスと職人技を活かしたクルマ造り。さらには卓越したチューニング技術で、矢張り早に魅力的なニューモデルを送り出し、今や飛ぶ鳥を落とす勢いのマンソリー。ここでは拡大化の一途をたどるラインアップの、注目すべき最新モデルをチェックしてみたい。

驚異的な存在に登場できる大柄なクルマでもあり、意欲的に開発が続けられてきたのだと思ふ。

供給体制にも若干の変化が見られる。今までは究極の1台を限られた人へと届けるコンプリートカーばかりだったが、昨今はパーツ単位での供給も推進するようになった。その美しさに惚れ惚れしなうた、超・高価の花と誇めていた人も、外装だけとか、あるいはお気に入りのパーツとして美しめるようになったことは歓迎したい。

もちろんインテリアメイクやパワートレインの変更となると本国で対応する姿勢は変わらない。自らの理想を追求したコンプリートカーを作り続けるスタイルもまた然り。車種やアップローチは増えてもマンソリーの哲学は不変である。

誰 もが誇る最高峰のグランツリースモあるいは高級サルーンも、これでもかというほど自分色に染めてきた。コウロッシュ・マンソリーが指さ、そして具現してきたマンソリーブランド。ベントレーやアストンマーティンを用いて、世界中の富裕層の心をかち取り続けた。そして、ここに来て新たな潮流が生み出されている。ずばり言うならば車種拡大である。発端は2007年11月にスイス・チューリッヒにあるチューナー「リンスビード」のチューニング部門を買収し、ボルシェに進出したこと。その勢いは止まらず、今ではここにあるように世界を代表する欧州自動車メーカーを素材に多くの作品を生み出している。

この動きは、すでに本誌を始め多くのメディアで紹介されている。それこそ各地のメジャーモーターショーが開催されるたびに新車を発表しているほどだ。簡単に列記するだけでも、祖となるベントレー、アストンに加入、ロールス・ロイス、ブガッティ、フェラーリなど、スーパー系、を網羅し、リンスビードの流れを汲むボルシェや、メルセデス、BMWなどにも進出し始めている。

「ここ」で紹介するのは、昨年あたりから徐々に発表されてきた新作ばかりだ。いずれも各ブランドの個性を活かしながら巧みにマンソリー色に染められた逸品である。注目すべき潮流として、とりわけレンジローバーやX6、別ページでご紹介するGクラスなど高級SUVがある。

SUVへの進出はリンスビードを根に持つマンソリー・スイスが発端となった。ボルシェをカスタムするユーザーの多くは他にSUVを持っていて、SUVへの進出を望む声が多く集まったのだという。それはマンソリーが得意とするインテリア構

MANSORY SPECIAL

MANSORY GHOST

2010年3月のジュネーブで公開されたプログラムロールスロイス・コーストガ。ショーに展示されたのはショッキングブルーにゴールドという実に個性豊かな車体。その高みに登るにつれ中身も凄い。タービンの大型化、ECUおよび駆動装置の変更などによって最高出力720ps、最大トルク87.7kgmへと向上されるチューンドロールスなのである。



マンソリーのトップモデルに登場するリニア・ヴィンチェロ(ヴェイロン)。その限定バージョンとして新たに登場した異なる派手なリニア・ヴィンチェロド・ロロ。外装にカーボンパネルを身に着けているのもあるものの、グリルやサイドミラーなどがゴールドで仕上げられているのが特徴。また、同様にゴールド色のレザーでトリムされた内装も豪華。

MANSORY LINEA D'ORO

MANSORY Switzerland 911 TURBO

リンスビードからマンソリー・スイスに変わって造られたプログラム。空力を削減したエアロパーツと23インチホイール、さらには自産品のインテリアに注目されるが、それでも他のプログラムに比べると絶大な存在感。エンジンはECUと駆動装置の交換でターボパワーを付加させる。強靱なボルクシエ・チューニング業界に誇り込みをかける1台だ。



MANSORY GRAN TURISMO

マンソリー初のマセラティがこのグランツリースモだ。新車の中核はGTとシムラン。それでもリッパースポーターに改良されたサイドスカート、エアインテークが追加されたボンネットなどマンソリーらしい造形は随所に見られる。インテリアもボディに合わせて赤黒基調。クロスステッチのソフトレザーが使われている。



本拠地ドイツ・プラントを訪ねて。 宿る、マンソリーイズム。

ドイツ・バイエルン州プラントに本拠地を構えるマンソリー、世界に衝撃を与えた究極のコンプリートカーの数々は、この場所で生み出されこの場所から世界中に送り込まれた。華やかな表舞台での活動ばかりに目を奪われがちだが、その製作現場では極めて緻密で繊細な作業が行われていた。



**MANSORY
SPECIAL**

世 界でもっとも賢次にして華やかで、だれもがワオッと声を上げるクルマが作られるファクトリーは、ドイツ南東部バイエルン州のプラントという小さな町の郊外にある。世界の愛好家はその名を知られるマンソリーのヘッドクォーターは、ブランドイメージとはおおよそ似つかわしくない、うっそうとした草原のなかにぽつりと建っていた。

う低いなり音が私を包み込んだ。赤いマセラティ・グラントウーリス。モは仕上げの最終段階にあり、カーボンファイバー製リヤスポイラーの角度を調整中だ。BMW X6 Mも、12時間後にスイスのオーナーへ納車するべく追い込み作業に入っている。マンソリー自身のメルセデスGの作業も急ピッチで進行中だ。

社説な光景が目の前に広がる。製作中のレンジローバーとカイエン・ターボがフロアの隅に肩を並べているかと思えば、サイラス（アストンマーティンDB9）の隣に、カザフスタンのナンバープレートをつけたファントムが置いてある。私は全部でいくらかになるのかざっと計算して

みた。220万ポンド（約2億9000万円）といったところか。いや、あのボディカパーを掛けられたクルマはヴェイロンに遠くない。頭の中の数字が450万ポンド（約5億9000万円）に跳ね上がった。ワークショップのフロアはオイルの染みひとつなく、整然とレイアウトされている。これと対照的に、オフィスとスタジオはほぼカオス状態だ。空いている空間は様々なパーツとコンポーネント置き場に化している。22インチホイール、明るい色に染められたレザー、ターボチャージャー、エキゾーストマニホールド、ウッドパネルのサンプル、そしてあらゆるパターンのカーボンファイバー

の部材から成り立っている。「マンソリー・スイスがレンジローバー、ボルシェ、BMWを扱い、マンソリーがそれ以外のブランドを扱います。」「コウロシユが続ける。「れっきとしたメーカーとまったく同じ製造プロセスに従ってクルマを作ります。CAD/CAMを駆使して、何週間も設計に費やします。様々なモデルも自社製です。完成車のテストも社内で行うのです。」

マンソリーはパフォーマンスよりデザインを売りにしているようだが、と質問を向けると、コウロシユはその通りだとさりと認めた。「現代の高級車はもう十分にパワフルだと思いませんか？ 今後、パワ





TOP VOICE

**MANSORY C.E.O.
コウロシュ・マンソリー**

「追求するのは性能ではなく、
世界唯一の特別な存在感です」

インタビューが始まるやいなや、コウロシュ・マンソリーはエネルギーに語り始めた。私が何気なく口にした「チューナー」という言葉をきっかけに、彼のクルマ作りのポリシーが明らかになった。「チューナーと呼ばれるのは、実は不本意でしてね。私はラグジュアリーカー専門のカスタマイザーなのであって、オーナーの感性を満たすクルマを仕立てるのが仕事です。世界の富裕層が求めているのはむやみに動力性能の高いクルマではなく、この世に1台しかないクルマなのです。また、いずれは100%オリジナルのコンプリートカーを造りたいと思いますが、最大の難関は電子制御装置です。これを正しくセットアップするには途方もないコストがかかります。そのために現在ベントレーとの協力関係を強化しています」

コウロシュが抱く将来のビジョンは明確だ。純マンソリー製の「コンチネンタルGT」が少量生産されるのは、遠い将来のことではなさそうだ。

「毎日、違う形状のパーツを製作するのが最大の難関です」とミスバウマーは語る。「ここにはオートメーションのラインなどありません。すべてハンドメイドなのです」

ルードに貼り付けていく。次に丈夫な耐熱ビニールのフィルムでサンドイッチした状態で、1バールの真空ポンプに繋いで内部の空気を抜き取る。その後150℃にセットしたオートクレープで約3時間かけて焼き上げるのである。



を払うのです。でもこの世に1台しかないクルマを手に入れるのに値段のつけようがあるでしょうか?」そう語るコウロシュは自ら認めるように、マンソリーがカスタマイズするモデルは必ずしも万人受けするものばかりではない。

しかし高級車市場で着実に購買層を拡大している彼の経営手腕は見事だ。これまでのところビジネスは順実に伸びているし、さらなる飛躍も視野に入れていく。なるほど、目の肥えた顧客が所有するヴェニゾンやファ

ントムを預かって、好み通りに仕上げるというのにはよほど勇氣のある者しかできないことに違いない。

コウロシュ・マンソリーは僕を見るに彼なビジネススマンという枠組みを超えて、独自の市場を開発する才覚と度胸の持ち主なのだ。ファクトリーを訪ねて、私はそのことを実感することができた。

整然と並んだ高級車の数々に、
職人が手作業で独創を紡いでいく。



「とパフォーマンスの重要性は相対的に低くなっていくと思います。むしろ五感に訴える質感こそ重視されるようになるでしょう。私はそう確信しています」

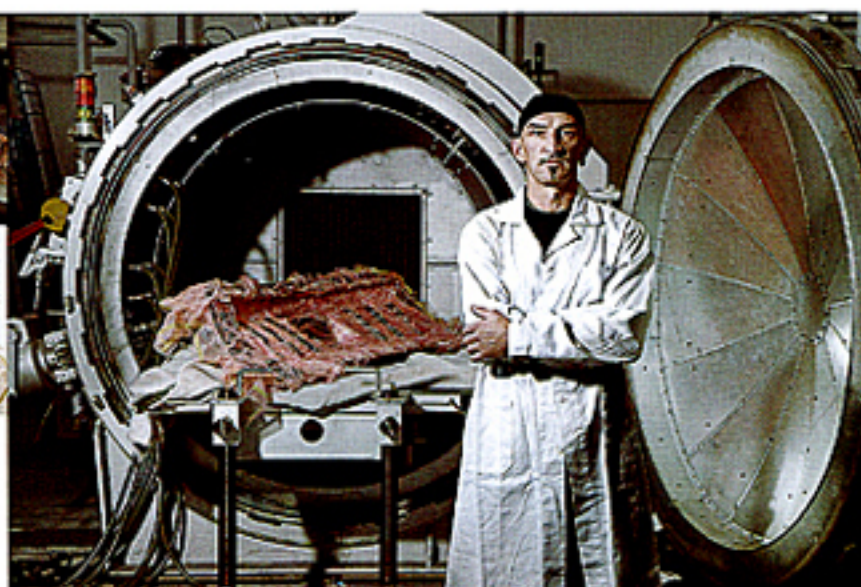
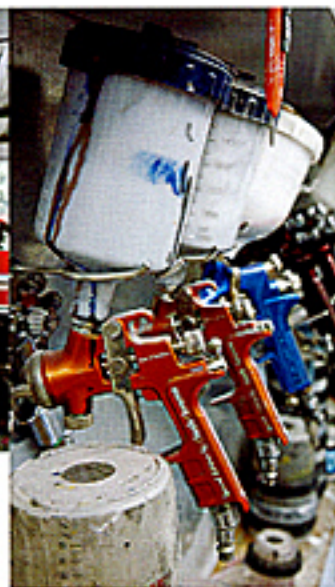
世界経済は崩壊寸前なのかも知れないが、彼はまったく意に介していないようだ。

「私たちの顧客は経済情勢の影響を受けたい人ばかりです。これまで最大の市場はアメリカでしたがリマーンショック以降、需要が止まってしまいました。一方、日本とロシアの販売は順調で、UAEの市場は以前からずっと成長を維持しています」

今年の生産台数は約60台と見込んでいますが、時間さえあれば100台まで伸ばせるという。「私たちはいつも時間に追われているのです。実はこれからフランクフルトのクライアアントに会いに行きますので、私はここで失礼します。ぜひカーボンファイバー工場もご覧になってください」

「コウロシュはもう言い尽くしたのだ。ただしくその場を去っていった。マンソリーのカーボンファイバー工場はチェコのマリアーンスケー、ラズニエにある。飛ばせばプラントからクルマまで1時間の距離だ。ここでは美しく輝くボンネット、グリル、ドアハンドル、リヤディフューザーなどマンソリーモデル用のカーボンパーツをテーラーメイドしている。チーフテクニシャンであるイジー・ヌスバウマーの実内でも内部を見学する。巨大な魚雷型をしたシヨルツ製のオートクレープが2基設置されている。「この作りのようにオートクレープとは、生の、カーボンファイバーを加压状態で焼いて硬化させるオーブンのことです」とヌスバウマーが説明してくれる。

指輪を染みこませた炭素繊維をレーザーによって求める形にカットすると、あらかじめ作っておいたモー



ファクトリーでは多岐なツールが使われている。ツールボックスにはキラキラと輝くスタンプの工具が並び、ラップトップのすぐ横には木製の小のこやラバーヘッドの重たいハンマーなどプロシブなツールが並んでいる。最新の工作機器で精密に機械加工されたパーツ類を、ファクトリースタッフが慎重に手作業で車体にインストールしている。まさにハイテクとクラフトマンシップの融合。マンソリーの独創性は、こうして生み出されているのだ。

チェコのカーボンファイバー工場が備えるオートクレープは1基約50万ポンド(約800万円)と高価だが、高品質なカーボンパーツを少量製作するにはコスト面でもっとも採算性が高いという。作業はメールドに貼り付けた炭素繊維を樹脂フィルム(織物バッグ)で包んでから真空状態にし、クレープで焼き上げるというもので、ちなみにドイツとスイスのファクトリーでは18名の、チェコでは102名の従業員が働いているという。

マンソリーに興味を抱き、それを手にする人達のはほとんどは、ライフスタイルにも一途である。なにせ、どんなにゴージャスでバカッさいクルマでも、ツルシじゃ満足できない人達である。だからこそ、スペシャルチューニングのマンソリーに手を伸ばす。ゆえに彼らは急成長中である。

そうした顧客層のニーズを知ってか、あるいはコウロシ・マンソリーの単なる欲求なのか、ともあれマンソリーにはクルマ以外にも多くの作品が存在するのはあまり知られていない。

時計、バッグなどの身につけるものから、家具にいたるまで、その種類は膨大だ。だが、これらは限られた人達へと届くカタログが存在するほか、本国ホームページでもわずかな情報だけが記載されているのみ。もちろん彼ら自身も大きなプレゼンテーションをしているわけではない。知る人ぞ知るブランドなのがあつた通り、ユーザーの心にグッと刺さるわけだ。



HOT TOPICS

ヨット、時計、インテリア etc.....

豪華絢爛の日々。

マンソリーのカタログを開いたのなら、誰もがそのコンプリートカーの華やかさに驚くだろう。しかし、バラバラとページをめくる手が止まるのは、実は車両カタログページが終わった後だったりする。そこに掲載されているのはなんと.....

例えば腕時計。マンソリー・クチュールというブランド名で展開するそれは、マンソリーの代表的なプログラムに合わせたデザインを持ち、17世紀から続く英国の伝統的な時計ブランド「GRAMHAM(グラハム)」とのコラボレーションにより作品が生み出されている。グラハムの伝統的なクォーツグラフとマンソリーのカーボン技術が融合したユニークなラインアップを持つ。さらに家具の世界も少し覗いてみよう。いかにもマンソリーらしい原色を巧みに活かした色合いを持つオフィス・チェア。これには自動車の内装を手がける職人技を用いた強さと美しさがある。こうした本業を使ったものとしては、高級アパレルブランドとして確固たる地位を持つフィリップ・ブレインとのコラボレーションによって製作されたバッグなどもある。という

M

TEXT ● 中三川大地 (Daichi Nakamigawa)
PHOTO (カタログ撮影) ● 石河正武 (Masamune Ishikawa)

MANSORY & MARINE
MANSORY COUTURE

わけで、外に出たときも家に戻っても、あるいはオフィスでも完全にマンソリーに囲まれることができちゃうのだ。

かくしてマンソリーは、究極の自動車カスタマイズ・ブランドの総嘴を軽く飛び越えて、いまやアッパークラスの生活、趣味全般を満足させる一大ライフスタイル・ブランドへと成長を遂げているのである。

そんな流れの中で、究極の位置にあるのはやはりクルーザーなのだろう。有力クルーザーブランドと手を組み、マンソリーはとうとうクルーザーまでプロデュースしてしまった。自動車好きは時計好き、そして船と飛行機も大好き.....という、いつの時代も世界共通の嗜好に、マンソリーは全方位で応えているのである。そのうちマンソリーは宇宙船まで造ってしまうんじゃないか。そんな究極が、究極ではなくなる日が、すぐそこまで来ているかもしれない。



マンソリーの店の中にある「フィニッシュ」の項目を覗くと、金や赤や青など印象的なカラーリングのオフィスチェアが出てくる。そして、そこに掲載されているのは、美しい写真とマンソリーブランドのロゴが全てを物語る。

全

身カーボンをまとうワイドボディでありながら、まるで知る葉は爪を隠すように敷いてペイントし、静かな迫力をたたえるこのGクラス、マンソリーの注目作「Gクチュール」だ。世界限定7台のうち、ホワイトの外装にブルーの内装という超個性的なバージョンを本誌はキャッチした。

Gクチュールは、プレミアムSUVの中心選手として活躍するGクラスに目を付けたマンソリーが、2010年のジュネーブで発表したもの。ショーに展示された個体は、無骨極まりないカーボン削き出しのワイドボディに、あのSLRマクラーレンのコンポーネンツの多くを惜しげもなくプチ込んだV8スーパーチャージャーエンジンを搭載し、最高出力700ps以上を發揮するというモンスターSUVだった。さらにインテリアを始めとしたマテリアルはファッションや家具のデザイナーとして名高い高級ブランド「フィリップ・ブレイン」が手がけるなど、まさに贅を尽くしたモデルだった。

この個体も、基本的にはショーモデルと同一仕様である。すなわち世界限定7台のうちの貴重な1台。だが、「オートクチュール(オーダー

メイド)」から取ったGクチュールであるだけに、ここまで個性的な内外装に仕立てることができる。ホワイトで彩られた外装は、フェンダーやボンネット、前後バンパーなどボディのほぼすべてをカーボンで覆い尽くしているが、Gクラス固有の雰囲気を崩していない。デザイン力はもちろん、それを具現するカーボン成型技術の確物である。

内装だってすごい。特徴的な形状を採用したダッシュボードはカーボン製で、トリムやシートは貴金をイメージさせるブルーとホワイトをふんだんに盛り込んでいる。ホワイト・カーボンの外観から、つい黒っぽいインテリアへいきそうなところを、敷いてブルー系に挑んだセンスには脱帽である。

ちなみに、世界限定7台はすでに完売しているという。だからといってこのGクチュールは「絵に描いた餅」として終わったわけではない。カラーなどを自分好みに仕立てられるシステ

ムを含めた内外装のパッケージは、これからも継続的に造られ世界中に供給されるという。パーツを取捨選択したり、どこをどうカラーリングするか、CGを使ってやりとりをしてオーダーメイドで仕立ててくれるのだ。つまりGクチュールによって世界にたった1台のGクラスを手に行けるようになったということだ。

流行り廃りの激しいSUVカスタムの方で、そうしたムーブメントを超越したかのようなGクチュールを、奇抜なチューニングカーとして見過ごしてはいけない。一生モノとして所有するのに相応しいだけの本物のストーリー性と、高次元の質感を持っている存在だ。

HOT TOPICS

本誌独占公開!
最狂のG、登場。

まさに史上最強のSUVと化した「Gクチュール」。現在、世界限定7台となる市販用車両を製作中だが、その中でも特に強烈な仕様を採用した最狂のGを捕捉。マンソリー社からも一切アナウンスされていない貴重なその姿を独占公開する!



MANSORY SPECIAL
TEXT ● 中三川大地 (Daichi Nakamigawa)
PHOTO ● MANSORY

Gクチュールは強靭な動力性能や外装ばかりが目立ちますが、同時にスゴいのはフィリップ・ブレインがプロデュースしたインテリアだ。独特の形状を持つダッシュボードやミドルコンソールに加え、職人技のバケット型シートなど豪華の作り込みを持つ。